

21世紀における最も重要な課題の一つは水問題の解決であるといわれている。

いうまでもなく、水は人間の生存に必要であるばかりでなく、その生活には多量の水を必要とする。そして、たえず増大してゆく人口と、ますます進展してゆく経済を維持するために、水をいかに確保するかということが当面の最大の問題である。

地球上の人口は西暦2000年までに倍増して約60億人となり、水の必要量は3倍程度になると予想されているが、現在でも世界の都市住民の40%は上水の供給がなく、とくに、これからはますます人口が都市に集中し、そこでは清浄な水の存否が人間の健康を保障するか否かを決定することになる。

このように、いまや水資源の開発利用が世界的に最も重要な課題となってきており、水資源という言葉も、いままでは経済的な資源という認識で用いられてきたが、今日では人間の生存上絶対に確保しなければならぬという、人間と水の関係になってきている。そして、この対策としては、長期的展望に立った広域的な計画をたて、先行的に着実にその実施を進めることが必要となってきている。

その具体的な例として、NAWAPA PLAN というのがある。これは21世紀には北米大陸の人口が2倍となり、水の必要量が3倍になるという想定のもとに、これに対処するため考えられているもので、この構想では、カナダのロッキー山溝に大貯水池をつくるとともに、延長850kmにおよぶ導水路を建設して、アラスカのユーコン川やカナダのピース川の余剰水の利用をはかり、また、カナダのフレーザー川およびコロンビア川の開発をはかって毎年1300億 m^3 の水をカナダ・アメリカおよびメキシコの各国に供給するというもので、完成までに30年を要するといわれている。

水資源開発の重要なことはわが国においても例外ではない。全国総合開発計画によると、昭和60年にはわが国の人口は約20%増の1億2000万人程度となり、その約70%が都市人口で、しかも大部分が首都・近畿・中部等の大都市圏に集中するものと想定されている。さらに、生活水準の向上等によって、水の使用量も増大して、その需要量は約3倍になるものと思われる。また、国民総生産は現在の30兆円から約140兆円となり、製造業の工場出荷額は5.4倍に、これに必要な工業用水は

4倍になると考えられる。農業用水も米作に要する水こそ減少するが、農業の近代化が行なわれて、畑地かんがい・酪農などがさかんになるため、微増であるが1.2倍程度と予想されている。

このように水の需要はますます増大していくが、これに対する水資源開発の現状はいかがであらうか。

現在、用水対策を緊急に実施する必要があると認められて水資源開発水系に指定されているものについて、その計画の目標年次、水需要の見とおしおよび供給の目標を記すると、利根川水系が昭和50年を目標として上水道用水・工業用水等の新規用水量が毎秒130 m^3 、これに対し供給施設計画として毎秒90 m^3 に相当するものが具体的にあげられている。淀川水系は目標年次、用水需給の見とおしが、いまだに決定していない。また、木曾川水系が昭和50年までに新規需要量毎秒73 m^3 のうち65 m^3 に相当する供給施設計画をもち、筑後川は昭和50年を目標に新規需要量毎秒23 m^3 、その供給施設として4 m^3 に相当する計画があるだけである。吉野川水系だけが昭和55年を目標として新規需要量毎秒33 m^3 に必要な供給施設を具体的に計画実施している。

以上のように、最も緊急に開発を必要とする水系ですら吉野川水系以外は、せいぜい昭和50年程度の目標しかもたず、しかも、その供給は需要にはるかに追いつかないという糊塗的な、その場限りの対策しかもっていないのが現状である。

現在わが国ではダムや水路の建設が逐次進み、水不足もかろうじて小康を保っているが、年々急増してゆく需要に対してこのような水対策のままでは早晩水ききんのため市民生活が脅かされ、産業活動にも重大な打撃を受けることになるのは明らかである。そして、これからは水系ごとに水需給のバランスをはかるようなことは、もはや不可能となってきていることからするならば、いまこそ、より広域的な長期の構想のもとに水系を連絡する導水路を建設して、各水系の開発をはかるとともに、相互に有舞相通ずる水利用計画をたてることが必要と考える。

このような施策を具体的に計画し、着実に実施することによって、次の世紀におけるわが国民族の生活基盤をつくり、今日まで世界の人々から驚異をもって評価されてきた高度成長経済を、さらに進展させて、いっそうの繁栄をはかることが、最も緊要と考え、提唱するものである。

* 正会員 水資源開発公団 理事